



## 北海道大学医学部創立90周年記念事業後援会の設立

医学部創立90周年記念事業実行委員会副委員長 小 山 司

周知のように、北海道大学医学部は来る2009年（平成21年）に創立90周年を迎えることになっています。1919年（大正8年）に創設されて以来、現在までに8,654名の卒業生が輩出し、北海道のみならず全国および世界に進出して、医学・医療に大きな貢献を果たしてきました。

創立90周年を迎えるにあたり、医学部会館（フラテ会館）の建設を柱とする創立90周年記念事業を計画し実施することになりました。本事業の実施には、多額の資金が必要となることから、医学部が行う募金活動を全面的に支援するための組織として、この度「北海道大学医学部創立90周年記念事業後援会」が発足されました。平成18年6月13日医学部臨床講堂において、その設立総会を開催いたしました。

設立総会には、役員・顧問に就任をお願いする同窓生の方々を始め、約70名が出席し、最初に、記念事業実行委員会委員長の本間研一医学部長から後援会設立総会開催にあたっての挨拶があり、記念事業計画の概要が説明されました。この紙面を借りてその一端を紹介させていただきます。記念施設「北海道大学医学部会館（フラテ会館）」の建設は、医学部キャンパス（現管理棟敷地）に、鉄筋コンクリート造、地上2階、建物延面積約3,600㎡の規模で建設する予定で、1階には、会議室、研究科長室、事務室、ギャラリー、エントランスホール等を、2階には、ホール、セミナー室、会議室、同窓会事務室、同窓会ギャラリー、ホワイエ等を設けるもので、建設費として8億円、同会館の設備備品費として1億円の計9億円を見込んでいます。また、医学部図書館を改修し、講義室として整備を行うことにしており、改修費として6,000万円を見込んでいます。

この他、記念刊行物として「北大医学部90年史」及び「写真集・北大医学部90年」の刊行と90周年記念式典、記念講演会及び記念祝賀会の開催を予定しており、これらの経費として、1,230万円を見込んでおり、諸経費も

含め総額10億円が基金の使途計画となっています。

本間医学部長の挨拶に引き続き、後援会会則が承認された後、後援会会長に廣重力先生、副会長には斎藤和雄先生ほか4名に、顧問には高桑榮松先生ほか48名に、主任幹事には橋本博先生ほか6名に、幹事には田畑武史先生ほか83名の方々をお願いすることになりました。続いて、後援会会長に就任いただいた廣重力先生から挨拶があった後、記念事業の概要及び記念事業募金要領を承認し、設立総会を無事終了しました。

以上、北海道大学医学部創立90周年記念事業実行委員会は、記念事業後援会の支援のもと、90周年記念事業基金を設け、10億円を目標に、医学部教員はもとより、同窓会会員の皆様、関係各方面に幅広く募金をお願いすることになりました。

医学部教員、同窓会会員をはじめとする関係各位の皆様のお手元には、医学部創立90周年記念事業基金募金趣意書が届いていることと思いますが、何卒、この趣旨にご賛同いただき、本事業達成のため格別のご支援、ご協力をお願いいたします。



後援会設立総会で挨拶する本間記念事業実行委員会委員長

# 先端融合領域イノベーション創出拠点研究 “未来創薬・医療イノベーション拠点形成”の紹介

医学研究科病態情報学講座核医学分野 玉木長良  
大学病院放射線部 白土博樹



## 1. 研究費の概要

平成18年から始まる第三期科学技術基本計画本研究に基づいて、イノベーションを生み出すシステムの強化がひとつのテーマとして挙げられ、これに基づいて、先端融合領域イノベーション創出拠点形成の公募が開始しました。



その目的は先端的融合領域において、産学官の協働により、次世代を担う研究者・技術者の育成を図りつつ、将来的な実用化を見据えた基本的段階からの研究開発を行う拠点を形成することにあります。先端的融合領域としては、人にやさしい統合

的医療システムを実現するための工学、医学、薬学、理学などの融合領域や、ナノバイオ、ITなどが挙げられていました。また対象とする拠点化構想として、計画当初から企業と対等な立場での協働体制を構築する構想であり、概ね10～15年先を見通し、革新的な技術の開発、新産業の創出などの社会的、経済的なインパクトをもたらす可能性がある先端融合領域において、世界的な研究拠点を形成すること、大学と企業が計画段階から対等の立場で連携し、将来我が国の経済・産業の国際競争力の強化に寄与するような成果をもたらすことを意識した研究開発を実施すること、などの条件が掲げられていました。国から支給される進行調整費は毎年2～5億円で、協働機関からの研究資源等のコミットメントは国からの資金と同程度の規模であることとされています。研究期間は10年ですが、最初の3年目は絞込み期間とされ3年目に再審査されます。

## 2. 研究申請の審査

上記の公募の内容を受けて、北海道大学では昨年末から研究戦略室を中心とした準備委員会を発足しました。企業との協同申請であり、金額もかなり大きいことから選定にはいろいろとご苦労があったと伺っています。各部局から申請のあった複数のプロジェクトを全学的視野で検討した結果、先端生命科学研究院と塩野義製薬との間で進められている未来創薬と、医学研究科と日立製作所との間で進められている分子イメージングとその応用の2つの研究を融合した形で、最終的に一本のプロジェクトにまとめました。特に北海道大学としては、ライフサ

イエンスに力を注ぎ、理学、薬学、医学等の連携により、生命科学の新しい研究、教育拠点体制を進展させ、システム改革によって患者さんのQOLを優先した未来創薬・医療拠点を作ることを目指しています。申請書は161頁に及ぶ膨大な内容です。

2月末に申請書を提出、書類審査の結果、各大学、研究機関から応募された45の申請の中から、15の申請が選定されヒアリングに回りました。ヒアリングには中村総長をはじめ、先端生命科学研究院の2名（五十嵐院長と西村紳一郎教授）と、私たち医学研究科2名の合計5名で日本科学技術振興機構（JST）に出向きました。研究内容だけでなく、将来性、国際性など多方面にわたる質疑がありました。その結果、採択された9個の申請の中に選ばれることができました。

以下に北大から申請された研究の主旨を記します。

## 3. 北大から提出した申請の主旨

### 1) 北大の研究の現状

北海道大学は基本理念として「実学の重視」を掲げ、研究成果の社会還元、産学官の連携協働の拡大のために研究戦略室を設置し、研究成果を北海道から世界に還元するとともに、大学院における高度な専門家及び職業人の養成・充実した社会人教育を実現してきた。「21世紀COEプログラム」は平成14、15、16年度にそれぞれ4、6、2件が採択され、世界最高水準の研究と専門家養成を行っている。平成14年度には大学内のさまざまな分野の融合拠点を創成科学共同研究機構を設立し、平成15年度には同拠点での研究成果を事業につなげるために「北大リサーチ&ビジネスパーク構想」を科学技術振興調整費にて実現し、北海道の特徴を生かした産学協同研究に向けた体制を着実に準備してきた。

医療関連分野では、バイオイメージング、放射線治療領域、置換外科・再生医学関連領域で寄附講座を開設し企業との連携による製品開発や製品化前の治験が増加している。フォトバイオイメージングの分野では、個体内の生命現象の時空間的解析を光プローブにて行う装置を浜松エレクトロニクス等と共同開発し製品化された。ポジトロンイメージングに関しては、平成12年からのトレーサ情報解析学講座（シーメンス旭メディテック株、日本メジフィジックス株）に続き、平成17年からは日立製作所・日立メデイコ（本事業協働研究機関関連会社）による分子イメージング講座が開設され、産学一体で人のPET診断装置や小動物に対するPETを用いた開発研究が開始された。また平成18年より北海道電力・日立製作所等により病院内に寄附講座「分子追跡放射線医療研究部門」が設置され、病院内での理工系修士・博士が

トランスレーショナルリサーチに参加する土台が構築された。他方、本学発の生体材料による人工半月板の開発や移植用細胞などの医療技術の事業化が企画され、ナノテクとバイオの融合が先端医療において結実しつつある。

創薬・医療関連の人材育成プログラムも充実しており、大学病院は、平成17年度に始まった文部科学省補助事業「地域医療等社会的ニーズに対応した医療人教育支援プログラム」（3年間）の採択を受け、教育支援プログラム専任教員6名を配してプライマリ・ケアと専門診療分野領域を幅広く修得した「応用力ある専門医」の育成にいち早く着手している。

## 2) 必要性・重要性・将来性

ヒトゲノム情報解析・ポストゲノム研究など大規模・網羅的バイオ情報の集積と知的財産化に向けた国際競争の中で、我が国の将来のバイオ医療産業基盤確保にとって極めて不利な状況にある。新規な創薬開発の鍵となる革新的な技術・リード化合物探索法・化合物ライブラリー等の知的財産化、ならびに創薬メーカー等を中心とする産業界と共有できる有効な研究基盤を早急に整備しなければ、ポストゲノム研究や次世代ポストゲノム研究の具体的成果としての新薬開発研究を我が国が今後優位に進めることは不可能である。

しかも、近年の創薬研究開発は従来の薬学領域のみならず、生命科学の広い学問領域の最先端の方法論と技術の連携と融合によって初めて円滑に展開できることが明確となっている。種々の新しい技術に基づいた医薬品候補分子のもつ機能の生物学的及び疾患の治療を指向した基礎臨床医学的評価等を、総合的かつ協調して有機的に進めることが一層必要となっている。

一方、わが国の医療診断治療機器に関しても、基礎的研究は依然として優れているものの、他国の巨大企業による寡占が進み、国際競争力の低下が加速している。10～20年後の未来医療技術は、測定機器の高精度化とともに、わが国独自の、特徴のある診断薬の迅速な開発が重要であるが、既存の工学系の機器開発分野と、理学薬学系の創薬分野との接点は乏しく、既存分野だけではブレイクスルーとなる研究開発は望みがたい。さらに、診断技術としての評価には実際の患者からの詳細な情報収集やプロトコルに沿った厳密な治験が必要であり、医学部と大学病院も含めた融合が必要となる。

本拠点化構想では、既に世界的レベルにある個々の研究を4つのハブとして集積化し、更におのおのハブが密接に連携することにより、世界最高レベルの創薬・医療技術開発を行っていく。フロンティア精神と実学の精神の土壌の上に立つ北大と日本を代表する2大企業それぞれが協働しながら、創薬ネットワークと医療ネットワークがリンクした拠点を構築できれば、10～15年後には今までになかった分子生命科学と先進医療機器の融合した統合的拠点を実現できる可能性が高く、本事業の先端融合領域としての将来性と重要性はきわめて大きい。

## 3) 拠点化の対象とする先端融合領域及び研究開発

以下に医学研究科が深く関与する2つのハブを紹介する。

### (1) フォトン・ポジトロンハブ

本ハブでは、将来のオーダーメイド医療における、発病予測と超早期診断法の確立のために生命活動を営むすべての分子に関する情報をそろえた分子カタログ（分子ライブラリー）の構築を目指す。特に光を中心とした光イメージング法を用い、他のモダリティであるPETやMRIと組み合わせ、Molecular Multimodality Imagingを構築する。この成果は多様な内容を持つ分子ライブラリーの中の分子画像アトラスを形作る。具体としては以下のプロジェクトが上げられる。

- ① 個体レベルを対象としたフォトリックバイオイメージングの基本的技術の確立
- ② 細胞内タンパク質ネットワーク相互作用解析の確立
- ③ RIプローブの開発、実用化
- ④ 統合的イメージング法による小動物、ヒトへの応用

### (2) 先端メディカルハブ

ライフサイエンスにおけるイノベーションを創出するには、“ベンチからベッド”と“ベッドからベンチ”の双方向の流れを確実にサポートする体制が必要である。先端メディカルハブでは当大学の医学研究科と探索型の大学病院とともに、ヘッドクォーターと運営委員会からの指示に基づき、本事業の各ハブと連携してトランスレーショナルな役目を果たす。病院は、院内において理工系系修士・博士がトランスレーショナルリサーチに参加できる体制を作り、上記の研究を推進するとともに、成果の出口としての機能を強化して、事業期間内に先端医療促進事業のセンター化を目指す。創薬に必要な全国あるいは地域の治験ネットワークとの連携を図るとともに、臨床統計研究者の本事業での雇用を4年目以降に行い、国際的な批判に耐え得る臨床試験を可能にする。具体としては以下のプロジェクトが上げられる。

- ① 個々の患者の治療の最適化に資する研究
- ② 分子追跡放射線治療の研究
- ③ 生体材料を利用したポストゲノム探索研究

## 4) 拠点化構想における達成目標

### (1) 3年目における具体的な目標

- ・実践的な糖タンパク質製剤等の新しい合成技術・構造解析技術、NMRやX線の自動構造解析システム開発などを行い、2～3種類の医薬品開発リード（医薬品となり得る候補）を創出する。
- ・ヒト疾患の早期診断のためのバイオマーカー探索を行い、2個程度の疾患関連バイオマーカーを発見する。
- ・光を用いた分子バイオイメージングを用いて、分子機能の経時的変化を可視化する系を開発する。
- ・半導体PETを小動物用に1台開発し、健常動物の生体内での機能を評価する。
- ・頭部用を導入し、脳虚血性疾患、脳腫瘍などの治療に対しての臨床研究を行なう。

- ・得られた頭部PET画像を他のモダリティ画像と融合し、放射線治療計画に連動可能なシステムを1台開発し、頭部における放射線治療計画に用いる。

(2) 7年目における具体的な目標

- ・膜タンパク質、高分子量タンパク質等の高精度構造決定法開発への展開研究を行い、数種の重要疾患関連タンパク質の構造解析を終了させる。
- ・創薬基盤技術を展開して、医薬品シード化合物ライブラリーの効率的調製技術などを確立し、更に3程度程度の開発リードを創出する。また、先行リード化合物の治験研究への移行を検討する。
- ・生体内での薬物動態研究の基盤技術として、臓器・個体レベルでのイメージング解析技術を開発する。
- ・RI分子プローブを最低1種探索し、病態モデル動物を用いて、標的分子機能の役割を明らかにする。
- ・体幹部用PET1台を導入し、同検査により虚血性心疾患、胸腹部癌などの治療最適化に資するための臨床的フェジビリティ研究を行う。得られた体幹部PET画像を他のモダリティ画像と融合し、放射線治療計画に連動可能なシステムを1台開発し、胸腹部における放射線治療計画に用いる。
- ・病院内に、薬物動態のシミュレーションや治験デザイン、解析を可能とするための臨床統計学の専門家を中心とした組織を立ち上げ、研究を遂行する。

(3) 実施期間終了後における具体的な目標

- ・新技術群を活用し生み出された医薬品候補化合物を実用的新薬の段階まで育てるモデルケースを示し、次世代医薬品候補化合物を連続的に創出する体制を確立する。
- ・創薬ターゲットタンパク質と、特異的に相互作用する低分子化合物の効果影響等を、特定のバイオマーカーの変動分析により治療成績予測モデルへと結びつけるround-trip型診断技術への展開を検討する。
- ・探索されたRIプローブに関して、ヒトでの安全性評価、早期診断や治療効果判定、予後予測等における有用性を評価する。
- ・創薬・トランスレーショナル研究で、小動物用PETを利用する。
- ・動体追跡装置とPET技術を取り入れた新たな放射線治療技術のフェジビリティ研究をする。
- ・臨床統計学の専門家を中心とした組織により、国際最高水準の治験を行なう。

(4) 実施期間終了後の取組

- ・運営には、イノベーションにて蓄積された知の財産からのロイヤリティー、さらなる企業との継続的な協働研究費、地域の資本導入をあてる。
- ・新たに民間企業、銀行などから資金を集めた北海道大学基金をあらかじめ設立し、これによる拠点・システムの維持を行なう。
- ・構築した拠点・システムは、優れた秘密保持環境を利用して、他分野・他企業との次なる融合を行い、

イノベーションを生み出すための拠点として利用できるようにする。

- ・培われた主幹技術をもとに高付加価値周辺技術を発展させるため、北大リサーチ&ビジネスパーク構想と協働して、地域のバイオ産業クラスターとの連携を深め、北海道の中小企業の育成と活性化に努める。

先端メディカルハブは、大学院にて先進医療支援センターとして、治験による収入、先端医療機器利用に対する診療報酬、先進医療に対する付加的収入を利用して、その維持費に当てる。

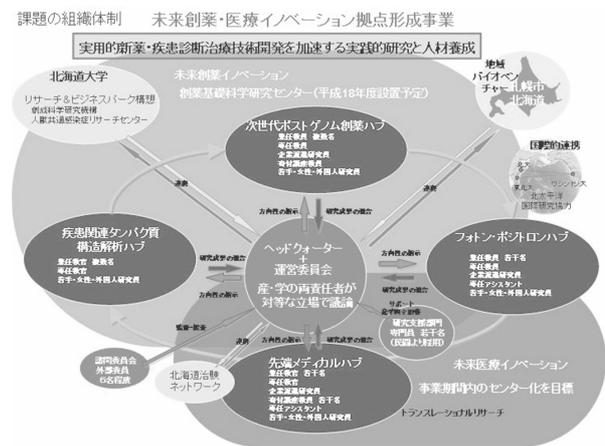
- ・企業からの資金をもとに臨床試験を行い、これを大病院の統計センターの管理・維持費にあてる。

5) 期待される波及効果

- ・本拠点形成が学内、学外との国際的人事交流、共同研究を活性化させる。
- ・本事業のモデルケースとしての成功をうけ、国内の大学・研究機関で融合新領域拠点形成が促進され、技術・人材の社会還元への意識改革が行われる。
- ・製薬産業、医療企業、これに関連したバイオベンチャー企業、化学企業、食品企業など産業界が活性化され、国力の増強へ繋がる。
- ・北大・北キャンパスで進行中である北大リサーチ&ビジネスパーク構想をもとに、本拠点形成により育成される新産業が創薬・医療関連企業の地域誘致を促進し、地域経済を活性化させる。
- ・優れた先端医療を多数取り入れた最先端の大病院として、優れた医療人の育成と共に、患者にやさしい先端医療の実践を推進する。

4. 医学研究科内での今後の取組み

ここ数年間、COEの申請など、大型研究体制の中に入る事が難しかった医学研究科が、このたびようやく大型研究費の中心的な役割を演じる機会が与えられるようになりました。この点で多くの方々から期待をいただいていることに満足すると同時に、重責も感じています。申請した研究内容を実施し、一定の成果を挙げることが急務でもあります。本研究は10年間ではあります



が、最初の3年間は絞込みの期間であり、再審査を受けて3分の1程度にまで絞られるとのことを聞いています。本研究は未来創薬と先端医療の融合と題した研究内容です。医学研究科には関連の深い領域ですので、ぜひ

多くの方々に研究に参加いただき、また建設的なご意見やご支援をいただき、北海道大学で魅力ある研究教育拠点が形成されますように心からお願いする次第です。

## 新任教授挨拶

医学部保健学科検査技術科学専攻 教授 山口博之



平成18年8月1日より保健学科検査技術科学専攻生体情報学講座にて感染制御検査学を担当しております山口博之と申します。社会のニーズに見合った魅力ある医学検査従事者をいかに育成すべきか、その事を思う時、職務に課せられた社会的責任の重さを痛感いたします。本稿では私のこれまでの研究と今後の方向性について紹介させていただきますとともに臨床検査に携わる者の状況を捉え今後の医学検査学を専攻する学生のための大学教育の目指す方向性について述べさせていただきます。

私は昭和58年に杏林大学保健学部臨床検査学科を卒業後、杏林大学医学部微生物学教室（緒方幸雄 教授（当時））に実験助手として就職いたしました。腸内細菌科に広く存在していた免疫学的に交差反応性を示す分子量約6万の蛋白抗原の細菌感染症における病原因子としての役割に関する研究に従事し、この蛋白が種々の環境因子に対応して誘導されるストレス蛋白であることを明らかにいたしました。同教室が神谷茂先生の指導体制に移行後（現在の杏林大学医学部感染症学講座）は講師として*Helicobacter pylori*の慢性感染症における細菌ストレス蛋白の病原因子としての役割に関する研究に従事し、*H. pylori*の胃への持続的な感染成立において本菌ストレス蛋白が重要な役割を演じていることを明らかにいたしました。その後、南フロリダ大学医学部免疫微生物学教室（山本容正准教授（当時））に留学し、動脈硬化症との関連性が注目されている偏性細胞内寄生性細菌*Chlamydia (Chlamydophila) pneumoniae*の細胞内持続感染機構解明のための研究に携わりました。その研究では*C. pneumoniae*が上皮細胞のみならずリンパ球細胞にも感染し、本菌の単球への感染はマクロファージへの分化を誘導することを見いだしました。そして平成16年4月より助教授として大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻生体情報科学講座分子生化学・分子微生物学教室（山本容正教授）に研究の場を移し、*C. pneumoniae*の持続感染機構の解明に向け教室に配属された14名の学生（平成18年4月時点）とともに研究を本年7月まで精力的に行ってまいりました。現代社会は新興・再興感染症起因

菌等による難治性慢性感染症の脅威に曝されております。それ故に、これら感染症の克服に向けた抜本的な対策の確立は急務な課題であります。そこで今までの研究経験を最大限生かし、ユニークな視点より難治性の慢性持続感染症の機構解明を精力的に行い北の大地より世界に向け有益でしかもインパクトのある研究成果を発信できればと思っております。

さて次に目指すべき学生教育の方向性に関して述べさせていただきます。昭和32年、日本で初めて臨床検査技師教育が開始された当時の検査技師に対する社会のニーズは、高度化を目指す医療技術の中で医師業務の負担軽減のための補助的な役割にあったといっても過言ではありません。その後、社会の多様化と医療技術の目覚ましい進歩の中で検査技師の役割も除々に変化し、検査技師に対して現代社会は、チーム医療の中での責任ある一員を担うことのできる人材を求めています。また大学の医学検査関連領域を専攻した学生の就職先も医療現場にとどまらず多岐にわたっており、専門的基礎知識や実技の習得に終始する既存の教育方針のみでは、検査学を専攻した学生の受け皿を限定しその可能性を狭めることにもなりかねないと大変危惧されます。社会は過酷で変動する状況下でも正確でしかも柔軟な答えを導き出すことを医療に携わる人々に求めています。それ故に、医学検査領域の専門・基礎教科を通した学生の問題解決能力の育成こそが、現代社会のニーズに見合った教育指針の根幹であると確信しております。具体的には明確でしかも魅力ある到達目標の提示と双方向型の授業ならびに実習を通したきめ細かな個別指導によって達成できるものと考えております。細菌学を通して学生の知的好奇心を徹底的に刺激するとともに医療現場に限らずいかなる領域においても大きく跳躍できるように学生を全力でサポートして行く所存です。

少子化に伴う全入学時代が目の前に迫っております。北大保健学科もその例外ではなく、前途は決して甘くはありません。大学にて医学検査領域の教育ならびに研究に従事する一人の教員として危機感を持ち生き残りを賭けた戦いに的確な戦略を持って積極的に挑む覚悟であります。まだまだ若輩者ではございますが、教育・研究に精一杯取り組み所存です。末永く皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

# 第45回医学展を終えて

## ～大学院重点化・法人化だけじゃない。医学展も改革の時!!

第45回医学展実行委員会 委員長 庄 司 哲 明 (医学部5年・84期)  
副委員長 本 間 舞 子 (医学部4年・85期)

### 【先ずは成功】

毎年6月の第1土、日曜日に恒例となっている医学展も今年で第45回という節目を迎えました。定番企画として市民の期待も高い「市民のための検査体験会」、「救急展示」、「講演会」、各種「体験会」、「献血」、「学生団体展示・模擬店」に加えまして、今年は「小中学生のための科学体験教室」が大変な好評を博しました。医学生として市民と交流の場を頂き、また市民にも医学教育の場を実際に訪れて知って頂くという意義を十分に果たし、まずは成功といえるのではないかと総括しております。関係各位のご協力にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

### 【医学展も改革の時!!】

一方で、次回第46回以降の医学展を考えたとき、医学展には避けては通れない問題点を抱えています。したがって今回第45回は実行委員会発足当初から次回46回を見据えた実験的取り組みを行うことを目標の一つに掲げておりました。そこで今回のこの文章では例年の医学展報告とは趣きを変え、医学展が抱える問題点と第45回での改革の取り組みについて述べさせていただきます。(医学展での各種催しについての報告は平成19年3月発行予定のフラテ93号で掲載予定です。)

医学展は教育的意義を認められ医学部・医学研究科の関係各位の多大なるご支援の下に成り立っておりますが、基本的には学生の楽しみの延長であります。よって

基本はその年の担い手を楽しみながら行うものです。そういった中で、“改革”とか“今後をみすえて”といった言葉には違和感を覚えられる向きもあるかもしれません。しかし、医学展は巨大な取り組みです。医学展と同時期に他の学部祭も行われておりますが、医学展は来場者数、スタッフ数、取り組みの多様性、資金量で圧倒的に上回ります。恐らく他学部祭をすべて併せても医学展には及ばないでしょう。したがって作業量も膨大であり、基本的な運営方法と定番企画は前年を踏襲し、その上で各回の工夫を加えます。基本的な部分で前年のノウハウを利用しなければそれだけで手一杯になってしまい、新しい企画が生まれる余地がなくなってしまうという面があります。したがって我々学生にとっては重大な関心事です。また、実はこの問題は運動系部活をはじめとして他の学生団体も共通して抱えてきた問題でした。こうした学生が抱える問題点の存在と取り組みの進捗を文章にして残すことは、医学部広報の発刊の趣旨(「医学部広報」発刊にあたり 第一号掲載)に反するものではなく、寧ろ発展させるものと考えます。

### 【二つの問題点】

これまでの医学展とは大きく変更を求められた点が二つあります。今回の医学展実行委員会ではそれら二点への対応に多くのエネルギーを割くことを余儀なくされましたが、翻ってこれをきっかけに医学展そのものの意義を



医学展前日：初の試みである横断幕と共に



救急展示：救急手技について市民に指導する一年生



市民検：余りの待ち時間の長さに「病院みたい…」との声も



講演会：森永卓郎氏、浅香正博氏、木藤潮香氏が講演しました

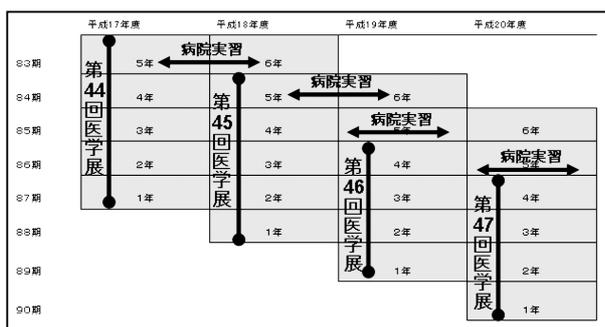
見つめ直すことが出来、結果として参加した学生の意欲・連帯感は例年になく高まったともいえます。この二点の為に第45回医学展実行委員会としては医学展運営の仕組みの改革に取り組み、多くの工夫が生まれ学生の意欲向上、来場者増につなげることができました。しかし、基本的にはこれまでの医学展運営の延長線上に過ぎず、抜本的な改革としては不十分と断じざるをえず、問題の難しさを実感し、そのこと自体を経験として引き継げることはプラスであるものの、解答を提示するには至りませんでした。

### ①カリキュラム変更の影響

#### ・病院実習が五年前期から開始（図参照）

変更点の一点目は折からの医学部カリキュラム変更の影響です。例年は前年の11月頃から四年生が実行委員会を立ち上げ約半年間以上の準備期間を経て、翌年の4月に五年生となった実行委員会のメンバーが下級生を巻き込み、6月にいよいよ医学展当日を迎える、という仕組みで行って来ました。しかし折からの医学部カリキュラム変更の中でも最大の変化である、臨床実習が半年前倒しされ五年前期から病院実習を行うということを85期生からの導入を来年に控えています。病院実習中は医学展に時間や労力を割く余裕はなく、また拘束時間も一定しないため綿密なスケジュールを立てることが出来ません。よって医学展の中枢として実務を担うことは不可能です。したがって四年生が実行委員会を立ち上げ五年生となって医学展を迎えるという従来の仕組みは第45回で84期が採用することは出来ませんが、第46回で85期が採用することはできません。第46回は必然的に中枢を担うのは86期ということになります。そうすると、85期は医学展で中枢を担う機会を失う、第46回以降は四学年で担うことになる（四年生が中枢、担い手が一学年分少ない）といった問題点が生じます。

そこで第45回医学展を通じて第46回以降の医学展のための実験的試みとして、第45回医学展実行委員会は立ち上げ段階から84・85期が合同で参画し、また各部門の責任者も両学年から半数ずつ選出することとしました。これは、三→四年生が医学展運営の中枢を担うことの可能性を、新カリキュラム第一号の85期で実験することを狙ったものです。結果、三→四年生では臨床医学の知識に乏しいという問題点が浮き彫りになりましたが、講義・試験スケジュールとの兼ね合いという面でのノウハウの蓄積は実現し、当初の目的は達し



たとえます。

実は例年、医学展を行う上で一番難しいのがこの実行委員会の立ち上げです。部活のように常設の組織ではなく単年度で解散してしまいます。また、新実行委員会発足時の手順も一切定められたものではありません。したがって誰が責任者をするか、或いは手を挙げた者の正統性をどのように確保するのか、全てはその年の雰囲気次第ということになります。しかし、この第45回については、第44回に参加した84期、85期ともに問題意識を共有しており、紆余曲折の議論を経たものの最終的には右のような体制の発足が実現しました。この時点で医学展が学年の枠組みを超えた取り組みとなっていることは、例年と比較すると超ウルトラC級の離れ業であり、第45回医学展が大変な連帯感のもとで行われる原動力となりました。

#### ・三年前期の過密スケジュール

五年前期の病院実習に関しては、具体的方策は一切取られてこなかったものの、ここ数年来指摘されて来た問題でした。しかし、ここへ来て新たなカリキュラム問題が浮上しました。それは三年前期の学生も講義・実習・試験に追われ（生理学・解剖学など）、特に医学展直前まで試験が組まれており、医学展に殆ど参加できないということでした。したがって第45回医学展でも人員の不足によりシフトを組むのに大変な苦労を要しました。第46回以降は四・二・一年生の計三学年で担わなくてはならないこととなり、第44回以前の五学年体制から三学年体制への変化は危機的なマンパワーの減少です。数年のうちに解剖学実習履修の学年がまた変更になるようではありますが、今後は定番企画についても規模の見直し、或いは完全な廃止を含めて改革は不可避となります。

第45回医学展としても企画内容の見直しと必要人員のスリム化の方向性を示すべきでした。しかし、我々は参加者の連帯感の向上の余勢を駆って寧ろ大規模化を志向してしまっただけです。第46回以降への実験を掲げた我々としては至極残念なことです。

### ②医学展を学友会の下部組織化に

学会をはじめとする各種団体の会計の改革に伴い、学生団体も問題が発生する前に会計の明朗化に取り組むべきとの学友会の方針が示され、医学展会計を次段落のように改めることとなりました。この内容自体は我々としては歓迎すべきものでありましたが、第45回医学展実行委員会としては既に活動が中盤を迎えていた平成18年の2月にこの方針が提示されたため、それに沿った具体案作りと医学展の準備そのものとの同時進行になり、また第45回としては既に進んでいた従来型の会計での予算執行との整合性をとることを余儀なくされ、大変な苦労がありました。

医学展実行委員会は学友会から金銭的にも協力を頂いておりましたが、各部活とは異なりももとは学友会の傘下ではなく、協賛金、広告金の受け付けなど外部との金銭のやり取りは単年度の実行委員会が直接に行ってお

りました。しかし、支出、収入ともに二百万円を超え、繰越金も多額であるということで、今後仮に問題が発生した場合の影響の大きさを考慮し、外部との金銭のやり取りの窓口と責任は学友会に置き、医学展に必要な資金は全て学友会の予算として扱うこととなりました。

また、これまでは医学展に必要な資金は実行委員会が独自に寄付金（協賛金）、パンフレットへの広告料をとという形で、医学研究科の各講座、同窓会、学友会、医院・病院、医師会、企業から募っておりました。現時点で問題が起きているわけではありませんが、今後一切の批判の可能性を事前に摘み取る為、学外からの寄付金（協賛金）の受付を全廃することとしました。また、医学部教員は各講座費と学友会費のいずれも拠出しており、医学展への二重の寄付に問題点も指摘されておりました。そこで、各講座から寄付を募ることを廃止しました。

また、各口座・学外からの寄付の廃止に伴い、その分の資金は当然減少する訳ですが、学友会には医学展の教育的効果を認め積極的に拠出することを表明して頂いております。今後の具体的な金額については第46回医学展実行委員会が発足した後に協議することとなっております。

学生として、金銭にからむ不測の事態を未然に防ぎ、また医学展の安定的な資金源確保という意味で、今回の決定を歓迎しております。

## 【展 望】

以上が今後の医学展の抱えるこれまでに無い難しい点です。今後は医学展を従来の規模で今継続していくのは不可能でしょう。次回第46回の主役たるべき86期（三年生）に対しては既に第45回医学展の報告会を行ってはおりますが、86期が殆ど準備段階から関わることが出来なかったことは非常に残念です。しかし、学生のみならず医学部、医学研究科の教職員、同窓生はじめ学内外からの多大な支援の下に、この時の逃しては実現できない大きなことをする絶好の機会です。実行委員会の立ち上げ時は負担ばかりを考えてしまい非常に難しいところではありますが、是非とも医学展は継続して欲しいと願うところです。

その為の協力は、第45回実行委員会のメンバーは決して惜しむものではありません。また、今回の医学展が大変な連帯感の下に行われ、そして貴重な学年や部活といった枠組みを超えた取り組みの機会として今後も継続していくことへの期待は非常に高いと、第45回医学展実行委員会は自負しています。

最後に、医学部・医学研究科の教職員、同窓生はじめ第45回医学展にご理解、ご協力を賜りました関係各位へかさねて厚く御礼申し上げます。

## 医学部学友会懇話会の開催

医学部教務委員会委員長 小 山 司

平成18年7月25日、学生食堂「はるにれ」にて、医学部学友会懇話会が開催されました。周知のように、これまで学部教員と学生との親睦・交流を深める目的で年中行事として学友会主催の運動会が開催されてきました。医学部教員、職員にとりましても、思い出深い伝統行事のひとつでしたが、近年、時代背景の変化とともに年々参加者が減少し、形骸化したとの意見も聞かれるようになりました。

本間研一医学部長の諮問に対して教務委員会で検討を重ねた結果、基礎医学コース移行時、基礎臨床コース移行時、臨床実習コース移行時の年3回、それぞれ2年次、3年次、4年次の学生を対象に、カリキュラムの内容についてのオリエンテーションを兼ねた懇話会を開催するとの答申に至りました。進級の節目節目で教員と学生との交流を深め、互いに啓発しあいながら教育の実効性を高めることにその眼目があります。

今回は5年次の学生を対象とした変則的な開催となりましたが、現5年次学生は旧カリ最後の学生であったた

めです。臨床実習オリエンテーションでは、教務委員会委員長から臨床実習カリキュラムのあらましと、実習時における基本的態度の要点について説明があった後、臨床系新カリキュラム検討ワーキンググループの責任者である西村正治教授から、新カリ移行期の対応として、新カリで実施が予定されている参加型臨床実習も取り入れた臨床実習ローテーションについて説明が加えられました。

引き続き、懇話会が開催され、5年次学友会委員の赤澤直也君が司会を務めました。本間研一学友会委員長の挨拶、教務委員会委員長の乾杯の後、自由懇談に移り、出席の各教授（13名）からのスピーチもあり、和気藹々の裡に懇話会を終えました。締め乾杯では、学生の庄司哲朗君から教員への謝辞があり、初めての開催であった学友会懇話会の意義を高く評価していただきました。主催側の一員として教員冥利に尽きる思いでした。

稿を終えるにあたり、ご多忙のなか約40名もの教員のご出席いただきましたこと厚く御礼申し上げます。

## 北大医学教育ワークショップ報告

医学教育開発室長 前 沢 政 次

平成18年8月18、19日の両日、月形町はな工房において医学教育ワークショップが開催された。出席者は34名で大まかに基礎系学部教育と臨床系研修医教育にグループ分けが行われ医学教育開発室長の前沢先生の講義と、活発な作業並びに討論が行われた。2日間で16時間を超える密度の濃い内容であり、特に臨床系の作業は参加者に好評であった。

取り上げられた題材は、日本の医学教育の問題点、教育による問題解決の可能性、学習方略の立案、教育評価、基礎医学講義の実際、試験問題の作成が基礎グループにおいてなされ、臨床グループでは後半2点が外来指導の実際、ポートフォリオによる指導であった。

1日目は本間研究科長による、「北大医学部の教育課題」と題する講義で終了した。その中で、これから大学においては教員の職務としての教育についていわば勤務評定がなされ給料に反映し、かつその評定は学生によってなされていく可能性が現在では高い、との言及に会場では多少のどよめきが起こっていた。

夕食後は、「北大医学部は特別入学枠（地域枠）を導入する」というテーマで気軽な雰囲気でのディベートが行われた。しかし、ディベート終了後には熱い議論に変化し、社会における医学部・医学研究科並びに北大病院の役割とその遂行の困難さを実感させられるものとなった。翌日、新聞各紙は医学部入試における地域枠を一部大学で導入すると報道し、まことにタイムリーな話題であった。

出席者のワークショップに関する意見は様々でおおむね好評であったが、討論の時間設定をもう少し増やすべきとの意見が数人から出され教育方法論の学習と、医学



教育に関する特定テーマを設定したフォーラム的なプログラムを、ある程度分けていく必要があるかもしれない。

また教育に自らも従事しかつ責任を負った立場の教員の参加があまり多くないとの意見もあり、ベテラン教員が繰り返し参加することが望まれる。しかし、大学における教育は業務として大幅に変化しつつあることから、今後は職務として参加が義務となる可能性もある。

最後に、会場のはな工房は、宿泊室も清潔できれいであり食事もよく温泉施設も充実しており、なおかつ札幌からの移動時間が短く非常に印象がよかった。これからのワークショップの会場設定については、特に臨床の教員が参加しやすいように考慮すべきであろう。一方でフォーラム的要素を考えた場合、国際会議において缶詰状態で討論を濃いものにするように、職場から離れた場所で行うことは議論を盛んにするために必要なかもしれない。

## 2006年 医学部医学科オープンユニバーシティと体験入学

医学部医学科・医学研究科アドミッション実施委員会委員長 渡 邊 雅 彦

少子化に伴い年々受験生数が減少している現在、優秀で意欲ある学生をいかに集め育成するかが、法人化以後の生残りをかけた大学間競争の1つの焦点となっている。オープンユニバーシティと体験入学は、全学アドミッションセンターが全体方針を立て、これに沿った形で各学部・学科のアドミッション実施委員会が毎年夏に実施している企画である。実に、北大合格者の4人に1名が、北大のオープンユニバーシティと体験入学に参加していたという集計結果も公表され、これらのアドミッション企画の重要性がますます増大している。この流れを受け、本年度から、保護者も参加しやすい日曜日にオープンユニバーシティを行い、高校生が対象となる体験入学を翌日に開催するという全体方針が決められた。しかし、医学部医学科オープンユニバーシティでは病院

見学を重要な企画の1つと位置づけているため、オープンユニバーシティを7月31日（月）、体験入学を8月1日（火）と、他の学部・学科より一日遅れる日程で開催した。

オープンユニバーシティでは、午前186名／午後88名の合計274名（昨年度は212名）と、これまでにないほどの多数の参加者があった。内訳は、札幌市内140名、札幌以外の道内89名、道外44名、不明1名であった。本間研一医学部長による挨拶の後、医学部紹介ビデオの映写、医学部・大学病院での教育・研究・診療の現場見学、質疑応答からなる2時間余りの企画として行った。現場見学では、参加した高校生や保護者を7つのグループに分け、医学科アドミッション委員と5・6年次の医学科生がペアとなって各グループを引率し、教育施設（解剖

学実習室)、研究施設(医歯学総合研究棟のオープンラボ、fMRI室、電子顕微鏡室)、診療施設(CT検査室、検査部、病理部)の7カ所を順に訪問した。訪問先では、それぞれの担当者が説明を行った。質疑応答も活発で、大学生活一般に関する質問にとどまらず、今年から始まった医学教養コースにおける英語優秀者に対する英語単位の認定や、医学科卒業後の進路、学士編入学に関する今後の方針等に関するかなり踏み込んだ質問も相次ぎ、高校生が自己の進路を探るための情報を真剣に求めており、オープンユニバーシティがその情報源として期待されていることを肌で感じた。

体験入学では、昨年に引き続き、解剖学の講義と実習を高校生が体験するという企画で行った。今年は102名(昨年度は50名)の高校生が参加し、札幌市内56名、札幌以外の道内27名、道外19名と、オープンユニバーシ



オープンユニバーシティ：質疑応答



体験入学：高校生のための脳科学

ティとほぼ同じ構成比率であった。本間医学部長の挨拶の後、脳に関する講義を30分程行った。その後、顕微鏡による組織プレパラート観察実習と、魚類からヒトに至るまでの脳の進化・発達や神経情報伝達に関する展示を示説する実習を行った。実習には、解剖学系3分野の教員・大学院生と医学科生が立ち会い、説明や質問への対応を行った。終了時に行った無記名式のアンケートでは、「医学部ならではの体験が面白かった」、「医学部に入って毎日こんな勉強をしたい」、「大学の先生や学生さんと直接話ができてよかった」などのポジティブな感想が多く寄せられた。また、満足度の5段階評価では4.6点もの高い平均点をいただき、来年に向けた指針と励みとなった。

最後に、オープンユニバーシティの現場見学で説明していただいた放射線部の渡辺良晴技師長、病理部の伊藤智雄副部長、検査部の伊藤敬子副技師長・鈴木春樹副技師長・安土孝則副技師長、大学病院皮膚科の秋山真志講師、分子解剖学分野の高山千利助教授、電子顕微鏡室の中村秀樹助手、fMRI室の宮本環研究員・寺尾敦研究員に深く感謝したい。また、オープンユニバーシティで引率や質疑応答を担当したアドミッション実施委員会の各委員、体験入学の準備と実施を担当した岩永敏彦教授・神谷温之教授はじめ解剖学系3分野のメンバー、オープンユニバーシティと体験入学で大活躍した医学生(6年、吉田美穂さん、高瀬ふみさん、渡邊美佳さん; 5年、大久保亮君、種井善一君、横畠絵美さん)、そしてこれらの企画全般の計画と運営に奔走していただいた教務第一係山本透主任はじめ医学部教務第一係の方々に、厚く御礼を申し上げたい。

**医学部医学科・医学研究科アドミッション実施委員会**

委員長	渡邊雅彦(解剖発生学分野)
委員	前沢政次(医療システム学分野)
〃	吉岡充弘(神経薬理学分野)
〃	村下十志文(大学病院循環器外科)
〃	畠山鎮次(分子医化学分野)
〃	田中真樹(認知行動学分野)
〃	渡邊智(法医学分野)
〃	山本有平(形成外科学分野)
〃	澤村大輔(皮膚科学分野)
〃	飛騨一利(神経外科学分野)

# 医学部保健学科オープンユニバーシティ・体験入学

医学部保健学科アドミッション実施委員会委員長 山本 徹

オープンユニバーシティおよび体験入学は、入学者選抜の立案、広報などを担当しているアドミッションセンターが毎年企画している全学行事です。保健学科では、多くの他部局と同様にオープンユニバーシティが7月30日(日)に、体験入学が31日(月)に行われました。オープンユニバーシティは大学の広報活動の一環として高校生やその保護者、市民も対象としていますが、体験入学は大学進学目的を明確化することなどを想定し、事前に申し込んだ高校生などに限定しています。しかし、オープンユニバーシティの参加者も大部分は北大に興味のある高校生であり、参加者のみならず実施する側からも両行事の違いの認識が薄れつつあります。今年は天候にも恵まれ、オープンユニバーシティの参加者数は午前部が210名、午後部が198名と合計で昨年よりも100名以上多く400名を上回り、保健学科説明会場の定員数をはるかに越え、急遽椅子を数十脚搬入し、冷房設備のない実際に熱気あふれる超満員の会場での開始となりました。このような状況は、保健学科への期待を実感させるとともに、今後の会場設営の課題も顕在化させました。今年は日曜開催が功を奏したためか、室蘭や旭川などから貸し切りバスで駆けつける高校もあり、札幌市以外の道内からの参加者が目立ちました。オープンユニバーシティでは、午前・午後それぞれ2時間半の同一プログラムが繰り返されました。まず、保健学科全体の紹介が

行われ、引き続き専攻探訪と称し「体のサインを読み取る」、「ITで病気を見つける」、「血液や尿などからなにがわかる?」、「筋力測定について」、「作業療法とは」などの30分間の説明・実習を約2時間の間にアラカルト式に3つ受講できるプログラムを準備しました。このプログラムは保健学科5専攻(看護学、放射線技術科学、検査技術科学、理学療法学、作業療法学)の中から複数の専攻を垣間見ることができ、参加者には好評です。また、月曜午後に開催した体験入学参加者数は昨年の約1.5倍の121名で、こちらは札幌市内からの参加者が多く、特に、看護学専攻、理学療法学専攻の参加者数の増加が顕著でした。保健学科全体説明に引き続き、各専攻にわかれ、体験講義・実習・進路説明などが行われました。ちなみに、例年、北大全体では体験入学参加者の約40%が実際に北大に入学しています。今年も多くの教職員の協力のもと、オープンユニバーシティ・体験入学が実施されましたが、それぞれの終了時に行ったアンケートでは「保健学科に入りたいという意欲がますます湧いた。来て良かった。」などの回答が多く寄せられ、関係教職員の励みとなっています。医療の質を向上させることのできる有能な人材が北大から育って行くため、今後もオープンユニバーシティ・体験入学が、意欲・知力ともに兼ね備えた入学者確保につながって行くことを祈っております。

## 第49回東日本医科学生総合体育大会 (夏季部門)

東医体評議委員 医学科4年 小幡 景太

準硬式野球	優勝
バスケットボール (男子)	優勝 (4連覇)
ボート	3位

第49回東日本医科学生総合体育大会(夏季部門)が帝京大学医学部、自治医科大学、獨協医科大学、東北大学医学部の4大学が主管校となり8月上旬に開催されました。

本学からは14団体が出場しました。主な成績は以下のとおりです。

なお、冬季部門はアイスホッケーが12月下旬に軽井沢スケートセンターで、スキーが3月中旬に志賀高原スキー場で、それぞれ開催される予定です。



## 日本病理学会学生ポスター発表への参加と優秀賞受賞について

医学部保健学科検査技術科学専攻 助教授 石津 明 洋

第95回日本病理学会総会（平成18年4月30日～5月2日、東京）では、若き学徒に病理学への興味を喚起することを目的とした「学生ポスター発表」が初めて実施されました。近年、病理学教育の現場では、従来の総論・各論講義や病理組織標本の鏡検実習にとどまらず、いろいろな工夫をこらした教育カリキュラムが展開されています。実際の症例の検討を行ったり、研究の一端を受け持つなど、少人数のグループに分かれた学生がいろいろな方法で病理学を学んでいます。今回の「学生ポスター発表」は、そうした取り組みの成果を発表する機会を学生に与え、病理を学ぶことの意義や楽しさを十分に体感してもらいたいという多くの病理学会員の考えに基づいて立ち上げられた新企画です。初めての試みであったにもかかわらず、全国35大学から73もの演題が提出されました。その内訳は、症例報告29題、研究発表44題でした。北海道大学医学部からは医学科5年生の6名が症例報告4演題を発表しました。

学会初日（4月30日）の午前8時30分よりポスターのパネルへの貼り出しが開始され、12時20分までは参加者が随時みてまわる時間帯でしたが、この間会場は諸大学の学生を交えた多くの参加者で終始あふれていました。12時20分から13時40分まではいくつかのグループに分かれ、各グループごと座長による進行で発表が次々に行われました。演者の発表は5分間、その後2分間の質疑応答が予定されていましたが、議論が白熱し、予定の時間をこえて討論が行われる場面もしばしば見られました。

発表に対しては、病理関連専門誌の編集委員の中から選出された8名の審査委員が審査基準に基づいた点数評価を行い、その結果、最優秀賞2題（症例、研究各1題）、優秀賞5題（症例2題、研究3題）が決定されました。優秀賞のうちの1題に、本学の三次有奈さんと浅野拓行君が発表した「リバビリン併用インターフェロン療法開始後、急速に肝不全をきたして死亡したHCVとHIVの重複感染例」がみごとに選出されました。

表彰式は発表当日の16時20分から学会のメイン会場で

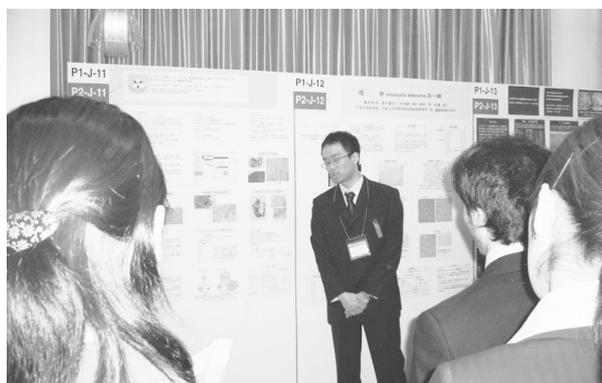


表彰される浅野君と三次さん

机の上には副賞の教科書10冊セット（10万円相当）

行われました。まず、審査委員長から審査結果の発表と講評がありました。その後、受賞者はステージにのぼり、学会長より表彰状が授与されました。また、副賞として複数の出版社より寄贈された教科書10冊（10万円相当）が贈られました。

本学医学部医学科では3年生を対象として、剖検症例や手術症例それぞれについて、患者の自覚症状から各種臨床検査データ、臨床経過、病理組織学的所見までを総合的に理解把握し、疾患の病態や診断、治療等を学ぶ「統合・病態演習」を病理学教育の一環として実施しています（責任教員：分子病理学分野 笠原正典教授）。毎年、何人もの学生が、演習期間が終了した後も病理学教室に立ち入り、スタッフと一緒に標本を鏡検して病理を学んでいます。今回参加した6名は、いずれも自主的にさまざまな症例の検討に取り組んでいた学生です。病理学教育に携わる者の一人としては、彼らが病理学的基础知識をしっかりとった臨床医に育ってほしいと願うと同時に、その中から病理学を志す学生が一人でも多く現れてくれればと願っています。



プレゼンテーションする三次さん（左写真）と浅野君（右写真）

## 医学部保健学科講座紹介「看護学専攻基礎看護学講座」

医学部保健学科看護学専攻 助教授 岩本 幹子

いつの時代にも、傷つき、病に倒れた人々や、若年者、高齢者等に対する「気遣い」・「配慮」・「共感」を含む「ケア」は、人間の自然な感情から生まれる「看護」として実践されてきた。しかし、看護は古来よりあまりにも自然に行われてきたがゆえに、現代の看護学の研究者たちは、看護の本質を捉え、語ることに大きな努力を要している。そして、医療技術が急速に進歩し、ヘルスケアシステムの複雑化、高齢社会の到来等によって、人々の健康を支援する看護のあり方も、急速な進歩が要求されている。

医学部保健学科は、2003年10月に発足し、各講座の完成は2007年となる。基礎看護学講座も、今年4月に2名の助手を迎えたことにより、森下節子教授、良村貞子教授の下、計6名となり、講座としてのかたちが整い、教育の充実と、研究への取り組みが始まったばかりである。看護学専攻は、基礎看護学講座と、看護の対象がもつ特性から、成人・老年看護学講座、母性・小児看護学講座、地域保健看護学講座から構成されている。この4講座において、基礎看護学講座は、実践の科学である看護の本質となる知識と技術を探求して、看護学の基礎となる概念や理論体系、看護技術ならびに看護管理、看護教育等の多岐にわたる教育・研究を行っている。

本講座の教育における責務は、1年次から3年次にかけて、学生を専門科目へ円滑に導入することにある。学生たちは、これまで両親をはじめとした多くの人々により育まれ、成長している。すなわち、学生たちは、多くの人々から「ケア」を受けながら、思春期にある自身の生き方や生活に大きな関心をよせている青年達なのである。私たちは、彼らの目を、看護を必要とする様々な対象者とその生活に向けさせ、看護学を修めることへのモチベーションを喚起し、増幅するという大きな使命を持っている。

看護学は、人間と健康、人間の生活する環境、看護に関する知識を獲得し保持することにとどまらず、その知



識を活用し実践しなければならない。このため、私たちは、初学者である学生に、看護のもつ意味や可能性を伝え、「看護とは何か?」と、学生自身が思索しながら、同時に知識に裏付けられた経験を通して学習を深めることが出来るように、学生の創造的な活動を授業に取り入れ、少人数グループでの演習を行い、学内における学習を臨地実習の場で実践できるよう、教育方法の創意工夫に取り組んでいる。

研究活動としては、人々の健康に貢献するため、一般の人々への健康教育方法の開発や、看護技術の解析を行い、効果的・効率的な技術を追究し、看護教育に活かすための取り組みを始めている。また、看護職員の役割と責任、及び専門性について、医療事故判例の分析等を通して探求している。さらに、臨床で生じている看護職者が体験する倫理的問題の分析と看護実践の動機となりうる看護倫理教育方法の開発に取り組んでいる。

科学技術の進歩に伴い、人間関係の希薄さが指摘される現代こそ、人間の相互関係として実践される看護学の重要性は高いと認識し、リーダーとして時代の看護を担う人材を育成するため、教育・研究に取り組んでいる。

### お知らせ

#### ◆ 平成18年度 医学研究科・医学部医学科「優秀研究賞」、 「優秀教育賞」、「優秀論文賞」及び「特別賞」受賞候補者の推薦 ◆

医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の顕彰に関する内規に基づく、平成18年度各賞（優秀研究賞、優秀教育賞、優秀論文賞、特別賞）受賞候補者の推薦を平成19年1月4日（木）～平成19年1月31日（水）の期間受け付けます（優秀研究賞、優秀教育賞及び優秀論文賞は、自薦も可）。

○賞の種類及び対象

- (1)優秀研究賞：顕著な研究業績をあげた専任教職員
- (2)優秀教育賞：顕著な教育業績をあげた専任教職員
- (3)優秀論文賞：特に優れた論文を発表した専任教職員・学生等
- (4)特別賞：医学研究科、国内又は国際社会に顕著な貢献をした専任教職員・同窓生

○各賞の人数及び副賞額

- ①優秀研究賞・優秀教育賞：年に各1名、副賞は1人  
当たり100万円相当
- ②優秀論文賞：年に若干名、副賞は1人当たり10万円  
相当

③特別賞：副賞は、1人（1件）当たり100万円相当

- 提出書類：受賞候補者推薦書及び候補者調書
- 推薦書等の提出先：医学事務部事務課庶務第一係
- 受賞候補者推薦書・候補者調書の請求先：

E-mail:shomu@med.hokudai.ac.jp

## ◆ 医学部医学科卒業試験日程 ◆

今年度の卒業試験は、9月4日（月）～11月10日（金）の日程で、医学部図書館3階特別会議室において実施されております。なお、卒業認定は平成19年2月8日（木）

開催の医学科会議で決定され、翌9日（金）に掲示により発表する予定です。

## ◆ 平成19年度医学部医学科学士編入学試験結果 ◆

平成19年度医学科学士編入学試験（募集人員5人）について、7月29日（土）実施の第1次選抜試験、8月17日（木）実施の第2次選抜試験を経て、9月8日（金）に最終合格者5人を発表いたしました。

入試データ

志 願 者	318人（男208人、女110人）
第1次選抜受験者	274人（男178人、女96人）
〃 合 格 者	31人（男21人、女10人）
第2次選抜受験者	30人（男21人、女9人）
最 終 合 格 者	5人（男3人、女2人）

## ◆ 第101回医師国家試験 ◆

来春2月に実施される第101回医師国家試験の日程が7月3日付けの官報により次のとおり公表されました。

出願期間	平成18年11月17日（金）～12月6日（水）
試験日	平成19年2月17日（土）・18日（日）・19日（月）
合格発表日	平成19年3月29日（木）午後2時

なお、願書等の書類の提出については、北海道厚生局からの要請により昨年度から、卒業見込み者については、教務第一係で願書等取りまとめ、一括して提出することになりました。具体的な日程・方法等については、決定次第お知らせいたしますが、出願期間が例年より3週間程度早くなっていますので、受験予定者にあつては提出期限の厳守等、ご協力をお願いします。

## ◆ 医学部保健学科3年次編入学試験結果 ◆

第2回目となる3年次編入学試験が8月26日（土）実施され、9月8日（金）合格者19人が発表されました。なお、入学手続き期間は9月27日（水）～29日（金）で辞退者があつた場合は、順次追加合格者を発表する予定です。

入試データ

専攻名	募集人員	志願者	受験者	合格者
看護学	10	32	32	10
放射線技術科学	3	10	10	3
検査技術科学	3	4	4	4
理学療法学	2	0	0	0
作業療法学	2	2	2	2

## ◆ 大学院平成19年度入学試験 ◆

### 1. 医科学専攻修士課程

去る、9月4日（月）に、午前は外国語【英語】及び課題論文、午後から専門科目試験が実施され、9月22日（金）に合格者20名が発表されました。志願者数等は次のとおりです。

出願者 27名（男16名、女11名）  
 受験者 26名（男16名、女10名）  
 合格者 20名（男10名、女10名）

なお、平成19年度から医学研究科再編に伴い、募集人員が従来の20名から30名に増員となることから追加学生募集を次の日程で実施いたします。学生募集要項については、近日中に医学研究科のHPに掲載され、10月上旬を目処に配付する予定です。

出願資格審査申請期間：平成18年11月20日（月）～  
 平成18年11月27日（月）

出願期間：平成18年12月18日（月）～  
 平成18年12月25日（月）

試験日：平成19年1月29日（月）  
 合格者の発表：平成19年2月23日（金）

### 2. 博士課程

博士課程前期日程の入学試験が去る、9月6日（水）午後から外国語【英語】及び専門科目試験が実施され、9月22日（金）に合格者28名が発表されました。志願者数等は、次のとおりです。

出願者 31名（男23名、女8名）  
 受験者 30名（男23名、女7名）  
 合格者 28名（男21名、女7名）

また、後期日程試験は、次の日程で実施されます。

なお、学生募集要項は、医学研究科再編構想に係る大学設置・学校法人審議会の審査を経て、文部科学省への申請後、公表・配付（10月下旬）する予定です

出願資格審査申請期間：平成18年11月20日（月）～  
 平成18年11月27日（月）

出願期間：平成18年12月11日（月）～  
 平成18年12月18日（月）

試験日：平成19年1月31日（水）  
 合格者の発表：平成19年2月23日（金）

## ◆ 第2回（平成18年度）北海道大学大学院 医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金助成者の決定 ◆

今年度で2回目となる「北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金要項」に基づく、奨学金被授与者が応募者28名（昨年度16名）の中から、次の15名（内、外国人留学生8名）に決定し、9月22日（金）13：30から第3会議室において、奨学金授与式が挙行されました。

博士課程3年	Rehana Basri
博士課程3年	崔 紅 艶
博士課程3年	Gino Cuarto MATIBAG
博士課程4年	張 悦
博士課程4年	馬 明月

医学科5年	木 脇 圭 一
医学科6年	内ヶ島 基 政
博士課程1年	氏 家 英 之
博士課程1年	藤 田 靖 幸
博士課程2年	大 村 優
博士課程2年	三 浦 会里子
博士課程4年	橘 田 岳 也
修士課程2年	孫 芹 先
修士課程2年	王 磊
博士課程3年	董 培 新



## ◆ 平成18年度科学研究費補助金採択状況 ◆

### 医学研究科

(単位：千円)

研究種目	新規申請数	継続数	18年度	
	件数	件数	件数	交付金額
特定領域研究	39	4	15	96,700
基盤研究 (S)	4	2	2	39,390
基盤研究 (A)	6	3	4	51,740
基盤研究 (B)	35	18	29	158,900
基盤研究 (C)	39	10	23	40,600
萌芽研究	52	14	24	38,400
若手研究 (A)	1	3	3	26,260
若手研究 (B)	19	6	17	31,500
合計	195	60	117	483,490

※ 採択率 (新規・継続を含む)  $117 \div 255 = 45.8 \%$

### 医学部

(単位：千円)

研究種目	新規申請数	継続数	18年度	
	件数	件数	件数	交付金額
特定領域研究	3	0	1	600
基盤研究 (S)	0	0	0	0
基盤研究 (A)	0	1	1	11,180
基盤研究 (B)	9	2	4	19,300
基盤研究 (C)	14	4	9	11,700
萌芽研究	14	1	2	3,500
若手研究 (A)	0	0	0	0
若手研究 (B)	8	2	2	1,462
合計	48	10	19	47,742

※ 採択率 (新規・継続を含む)  $19 \div 58 = 32.7 \%$

### 編集後記

今春から広報編集のお手伝いをさせていただくことになりました。学内にいると広報をじっくり読む機会はあまりないように思いますが、広報はホームページと同様、記事に直接関係している学内の方々よりもむしろ学外でよく読まれているとお聞きし、定期的に発行することの意義を改めて認識しました。大学からの情報発信の例としてもうひとつ、今年には医学科のオープンユニバーシティに参加しました。これは本号の記事にもありますように将来の学部生のための大学見学ツアーです。様々な観点から大学を比較して選択することができる今どきの受験生に、こうしたイベントを通じて積極的に情報を提供するのとはとても大切なことだと思われま。病院や研究室を見学している間も高校生たちは概しておとなしく、もっとざっくばらんに質問してもらえればもっとざっくばらんに北大を宣伝できるのにと歯がゆく思いながら、限られた短い時間でわが北大医学部の良さを伝えるのは難しいことだと実感しました。

(田中真樹)

### — Home Pageのご案内 —

医学研究科／医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho//index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

[kouhou-office@med.hokudai.ac.jp](mailto:kouhou-office@med.hokudai.ac.jp)

となっております。どうぞご利用ください。

### 北海道大学大学院医学研究科／医学部

発行 北海道大学医学研究科広報編集委員会  
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目  
連絡先 医学事務部事務課庶務第一係  
電話 011-706-5892  
編集委員 神谷 温之、西村 正治、高橋 光彦  
石津 明洋、田中 真樹、佐藤 松治